



りじりと首筋を焦がす強烈な日差しが気温をぐんぐん上げて、日本海に囲まれた隠岐の島といえども35度を超える猛暑日が続く。

く。ぼくが隠岐の島で暮らしたのはもう三十年も前になる。そこで四度の夏を経たのだが、こんな常軌を逸した暑さは、そのころはもろんなかった。

この夏、二度隠岐に渡る。その一度目がこの二十五、二十六日だった。「こども落語イン島後」と銘打った四回の公演の前半。呼んでくれたのは、実行委員会だが、まあ何か名前をつけないとかつこうがつかないという理由でそうしただけで、三十年前から親しくしている人たちのきわめて個人的なつながりに頼った企画である。

打合せや会場の下見もあるので、ぼくは一行とは別に一日早く入島し、迎えに来たSさんの軽トラに乗って、宿泊先でもあるSさん宅に向かった。そこは周囲二百キロの円形をなす島後のほぼ中央。フェリーや高速船が発着する西郷港から車で約十五分といったところにある。隠岐の最高峰である大満寺山へと連なる里山を背にし、前には田んぼが広がる。Sさんの家には、自宅に隣接するゲストハウスがあつて、ぼくは母屋もゲストハウスも何度か泊まっているのだが、それも二十年以上も前の話だ。ぼくが隠岐を去った後に、

ゲストハウスは「遊らんこ」と名付けられ、名付け親である里みちこさんのたゆたうような書の看板が掲げられている。

四方が大きく開け放たれて、網戸で仕切っただけの、まるで森の中に蚊帳を吊ったかのようなたたずまいだが、それでも猛暑に変わりのない。さすがに寝るときはエアコンかと思いつつ、寄席の準備に遊らんこを後にする。

再び帰ってきたときは夕方五時を過ぎ、日は傾いていた。裏山から入り込んでくる風がひんやり感じられる。えつ、もしかして、と扇風機を回して畳の上で寝転がってみると暑くもなんともない。網戸のすぐ先には奥深い森が広がっている。ここにあるのは幼いころ胸躍らせた夏休みの風景そのものだ。

夜は、柔らかく流れこんでくる風を感じているうちにあつという間に入眠。目覚めてみると夜明けまであと少しという時間だった。東の空が白んできるとヒグラシの声が聞こえてきた。日脚が伸びるにつれて音量が上がっていき、大合唱を経て、ウグイスやホトトギスの鳥や虫たちに交代していった。森に棲む植物や動物の夥しく重なり合ったいのちたちに包まれていると、自分もそれと等しい一つのいのちなのだと思えてきた。忘れ物がひよいと届いたようにして。

老い老いに

木幡智恵美

44



れからしばらくして十月二十二日に夕焼け通信は四百号に達した。三百号のような庄巻ではない。いつも通りの夕焼け通信である。編集後記は次の通り。

「四百号は区切りという気がしないので、淡々と迎えようということになったのですが…。編集人の困惑をお察しください。でも、こんなメッセージを贈ってくれる人がいてくれることをほんとうにうれしくそしてありがたく思っています」

編集人を困惑させたのは、K・Aさんから編集長宛てに寄せられた手紙だ。長いので抜粋を載せる。

「夕焼け」が四百号を迎えた。私が入れてもらってからでも三年を過ぎた。思えば編集長は不思議な人だ。この八年余りの間、みんなの原稿を集めパソコンで編集し、自分も原稿を書き、発送する。これを毎週やって休むことがない。「大変でしょう」というと「いいや」と涼しい顔をして言うのである。…(中略)…えつ、と思うような人と知り合いであつたりする。人と親しくなる名人と言っている。併せて、人と人を出会わせ結び付ける人でも。…(中略)…人の背中を押す人でもある。はじめは「〇〇してみませんか」というお誘いだったり、「お願いがあるんだけど」という控えめなお願いであつたりする。けして押しつけがましくはないのだ。けれど、なぜかそれに応えなくなってしまう。…(中略)…口説かれた人数知れず。だが、そのことを誰も悪く思わない。いや、後ではみんな感謝する。彼はいろいろな人の人生を豊かにする仕掛人である。本人は「そんなつもりじゃあ…」というだろうけど。…(中略)…「じゃあ、次の区切りの四百号に載せてよ。それならいいでしょう」「うーん…」…(中略)…今頃きつとすぐ困った顔をしているに違いない。でも、絶対載せてもらうつもりである。同じように思っている人がきつとほかにいらいつしやる、と思うから」

K・Aさんと同じ思いで共に歩んで三十余年。淡々と迎えた四百号を通過し、その後も編集長は様々な活動をし、多くの人と関わり続けつつ、編集、執筆、発送をし続けている。私はただ夕焼け通信という船に乗せていただき、波に揺られてきたただけだ。それでも淡々とながら、この通信が今や千五百号を超えたということだけは誇らしい。

30代フリーター 衆院選に続いて参院選でも自公が過半数割れた。

年金生活者 選挙だけでは政策の決定ができない状態がいつそう進む。個々の政策ごとに与野党が交渉し、世論調査結果がそれに影響を与えるという、国民投票的な要素が国会の議論に加わる可能性が出てきた。

30代 国民は自民党に特大級のお灸をすえた。

年金 お灸ではない。勘当した。初めてのことだ。2009年の民主党への政権交代でさえは勘当ではなかった。そのあとに安倍長期政権が続いたことがそれを示している。それまで謝れば赦していた国民はこんどばかりは赦さなかった。

国政選挙で2度続いた自公の過半数割れは、ヘーゲルの次の言葉を思い起こさせる。

《そもそも国家の大変革というのは、それが二度くりかえされる時、いわば人びとに正しいものとして公認されるようになるのです。ナポレオン

が二度敗北したり、ブルボン家が二度追放されたりしたもの、その例です。

最初はたんなる偶然ないし可能性と思っていたことが、くりかえされることによつて、たしかな現実となるのです。》（『歴史哲学講義（下）』長谷川宏訳）

おそらく今後は、自公政権が過半数を取り戻すことがあっても、それが常態化することはないだろう。

30代 自民党が自民党でなくなるような事態だ。

年金 これまで多くの国民にとつて自民党は数ある政党のひとつではなく、国家に準ずる存在だった。それを勘当したということは、今の国家のあり方、現在の民主主義の仕組みに疑念を突きつけたことを意味する。

その仕組みとは、成田悠輔のいう「代議者や政党にあらゆる政策・立法を委ねる『一括間接代議民主主義』」でも言うべき特定の「選挙制度」だ（『22世紀の民主主義』）。これまで国民は選挙のたびに否応なく自民党

に、そうでなければ野党に「あらゆる政策・立法を委ねる」ことを強いられてきた。しかし、これだと、この党にこの政策はやつてもらいたい、あの政策はやめてほしいという有権者が必ず出てくる。要求が多様化した現在はおさらいだ。

30代 様々な政策をとりそろえた百貨店のな政党の退潮と、政策を絞り込んだ専門店的な政党の伸長が参院選の結果にあらわれた。

年金 国民の大多数が貧乏だった戦後しばらくは、貧困からの脱出が国民の共通する要求だった。高度経済成長の時代に入ると、要求は「より豊かに」に変化した。豊かさが現実のものになると、マイホームなどを持つ中間層が形成され、そうでない層との格差が生まれた。大多数の国民が平等に貧しかった時代とは対照的に、豊かさは不平等に実現した。

そこから国民の要求の多様化が始まった。「等しく貧しい者たち」の味方だった日本社会党がまず退潮した。

人格が同居しているとみなされる状態になる。

その前提に立つと、個人Aを構成する人格A1と人格A2は、たとえばひとつの政策をめぐつて違う意見を持つ可能性がある。A1は選択的夫婦別姓の導入に賛成なのに対し、A2は子供の姓のことを考えると迷うといったぐあい。このとき両方の人格を併せ持つ個人Aは、同姓の強制が男女平等を損ない、仕事などに支障をきたしている

ことはたしかだと思う一方、子供の姓が一方の親と異なったり、きょうだい間でバラバラになったりすると困ることはないだろうか、と思索している状態にある。

こうした不都合を克服するために、鈴木健の『なめらかな社会とその敵』は「個人民主主義」から「分人民主主義」への転換を主張する。「分人」は個人Aの中の人格A1やA2に相当する。そのA1とA2に個人Aの1票を自分の望む比率で分配して投票できる選挙の仕組みを鈴木は提唱している。

30代 実現可能かどうかは疑問だ。

年金 少数与党化が完成した国会は、与党に「あらゆる政策・立法を委ねる」ことが不可能になり、政策ごとに選択をし直すことが必要になる。初めに言ったように、選挙結果だけでなく、世論調査結果が国民投票的な役割を帯びてその方向を左右する可能性が高まる。政党ではなく、個々の政策を選挙する民主主義にわずかなら近づいていくだろう。

ニュース日記 978
中村 礼治

「少数与党」という民意

多様化が進む社会では、個人はTPOに応じて別人格のように振る舞うことを強いられる。言い換えれば、個人の内部も多様化が進み、複数の異なる

30代 これまでの政党政治のあり方が問い直された選挙だった。

年金 政党ごとに投票するのではなく、個々の政策ごとに投票する選挙の仕組みが以前から提起されている。国民投票を小刻みにするようなやり方だ。